

令和2年度第2回高幡地域アクションプランフォローアップ会議 議事概要

日時：令和3年2月19日（金）10:00～12:00

場所：須崎市総合保健福祉センター 2階 会議室

出席：委員20名中、16名が出席（代理出席1名含む）

議事：（1）地域アクションプランについて

1）高幡地域アクションプランの進捗状況等について

2）高幡地域アクションプランの追加・削除・拡充等について

（2）産業成長戦略について

1）第4期産業振興計画 ver. 2の強化のポイント（案）について

2）観光振興の取り組みについて

3）移住促進の取り組みについて

議事（1）（2）について、県から説明し、意見交換を行った。（主な意見は下記のとおり）

議事については、すべて了承された。

※意見交換概要（以下、意見交換部分は常体で記載）

（1）地域アクションプランについて

1）高幡地域アクションプランの進捗状況等について

意見交換等、特になし。

2）高幡地域アクションプランの追加・削除・拡充等について

(No.1 くろしおミョウガ生産拡大クラスタープロジェクト)

(森光委員)

ミョウガの生産では、土の代わりに使う培地の交換が1年ごとに必要なため、培地の利活用が課題であったが、再利用の目途がついてきた。

今回、本格的にプラントを整備し8月末ぐらいまでには稼働したい。

プラントにより再生されたものは田んぼに元肥として使ったり、土壌改良材としても使え、ミカン畑の中での活用も予定している。この取り組みで、廃棄していた3,000トンを有効活用して、循環型の農業を目指していきたいと考えている。

また、ミョウガのパック詰めロボットが現在1台稼働しており、性能が良いため1台追加をする。

令和3年度末までにミョウガをトレーに載せるロボットを導入し、作業軽減を図った分の人手で生産拡大に取り組むなどの様々な工夫をし、ミョウガの産地としてさらに伸ばしていきたい。

(2) 産業成長戦略について

(大地委員)

高知県の取組として、耕作放棄地にコウヨウザンを植えて、それをバイオマス発電の燃料にして経済活動につなげるといふ、高知新聞の記事を見て非常に残念な思いをした。

過疎化が進む地域で耕作放棄地が多くあり、そこにコウヨウザンの植林県が奨励すれば、その地域がますます荒れて人の営みが出来なくなり、見捨てるということに繋がると考える。

地域には四国カルストや四万十川など貴重な観光素材がたくさん有るが、麓の地域の住民がいなくなり、あばら屋ばかりの幽霊屋敷になっては観光振興には繋がらない。

コウヨウザンなどの植林の奨励については、場所を選んで取り組んでもらい、集落地域には花木を植えていく様な政策を講じてもらい。

(森田地域産業振興監)

地域の声としてお話があったということは、しっかりと関係機関にも伝えていく。

(田村委員)

林業は木材価格の低迷で、山林所有者の意欲が減退している。また、四万十町の中でも、十和・大正では国土調査が進んでおり、境界がある程度分かっているが、窪川地区においては、まだ40%ぐらいしか境界の確定ができてない。そういう中で、不在地主や所有者の高齢化により山の境界が定まらない。

そのため、山林で事業をやりたくても、境界が分からないために事業ができない現状がある。今後、境界を確定できる施策を考えてほしい。

(崎山委員)

海に流入してくる河川から、大雨、洪水等によって山からの流木が多く流れてくる。高齢化等で山林の管理ができないということの結果だろうと思う。

そのような状況で、海岸線のサンゴがほとんど死滅した状態であり、磯焼けで海草も生えていない。また、岩ガキ、フノリ、テングサ等も皆無の状態となっている。森林組合も適正間伐など頑張っているとは思いますが、広葉樹を植えるなど、なんとか出来ないものか。

(柿部須崎林業事務所長)

年間、県下で600ヘクタールほど皆伐しており、それに対して200ヘクタール程度しか再造林されていない現状がある。原木の需要は伸びたが、再造林が十分にはされていない状況が全国の各地域で起き、森林資源が減っていることが課題となっている。

そういった状況の中、スギ・ヒノキは育つのに50年から60年かかるが、コウヨウザンは20年から30年で育つメリットが有り、嶺北地域でコウヨウザンの植林の試験な取り組みが行われているところ。

耕作放棄地については、まずは各地域の農業をされる方、農業公社など農業に係る組織で、耕作放棄地の解消に向けて取り組まれる事と思う。ただ、その中でどうしてもここはもう、放棄をせざるを得ないというふうなところには、コウヨウザンの活用も検討していただければいいのではないか。その検討の中で、サクラや地域を彩るものを植えていくことも大事なことだと思う。

山の状態が不明な状況については様々な施策があり、行政と森林組合や事業者が手を携えながら、境界不明山林の解消とその管理に向け取り組んでいくことが重要。

(長山委員)

観光に関し、各地域が高いポテンシャルを持っているにもかかわらず、広域の連携がまだまだ機能しておらず、十分に生かされていない。会議の持ち方や意見の出し方など関係者の連携のあり方について、もう一度検討する時期と思う。

(森田地域産業振興監)

域内の各市町には魅力的な素材が数多くある。広域でいかに活用するかを関係者がしっかりと協議できる形が必要。高幡地域には奥四万十観光協議会が立ち上がっており、観光の部署はもちろん地域の係わる方々と一緒にやっていくことで結果が出てくると思う。

(池田委員 (代理))

過去に奥四万十博が開催されたが、それ以降広域での動きが見えない。幡多地域、東部地域は実績も上がっている様に聞いており、そういった形になれば良いと考えている。

行政だけでなく、地域の業者や観光関係者などに積極的に意見をいただき取り入れていけるよう、協議会の中の机上の論理では進まないの改善出来ないかと考えている。

(森田地域産業振興監)

今年度、奥四万十観光協議会で広域でのクーポン事業を協議会で取り組み、改めて広域観光組織による広域的な取り組みの重要性を感じた。

来年度は現場の皆さんの声も踏まえながら、県も関係者の方々と一緒にしっかり議論していく。

(竹内委員)

これからは、衛生管理・食の安心安全というものを前面に打ち出した商品開発や環境に配慮した商品づくりが大切だと考える。

コロナ禍において、新しい生活スタイルに対応した商品開発や販路拡大をしていくということが重要であると痛感しているので、そうした事例があれば今後紹介してほしい。

(玉川委員)

過疎地には耕作放棄地が多くあり、非常に安価に借りられる。林業と畜産で連携し、植林後の幼木の草の処理を牛を活用して管理している。梶原に限らず高知県はほとんどが山間地なので、山間放牧が出来るのではないかと考え、現在実験的な取り組みをしている。

高知県の産業振興において、是非畜産の方にも目を向けてもらいたい。

(田中委員)

中土佐町において、大正町市場や鯉乃國プロジェクト等の取り組みに携わる中で、一番の成功した要因は、おいしいカツオを食べ、自分達が生きていくこの漁師町を残したいという思いを皆で共有した事だと思っている。

林業分野でも、木材を売る方達と山に住みたい、山を残したいという思いがある人とが一緒に取り組んでいくことが大事だと思う。

これから先、木や森の価値が上がってくると思うし、よその地域の人と一緒にまちづくりや販売戦略を考えていけば、面白いことができると思う。

(以上)